

## 青年期における親への愛着が友人関係に及ぼす影響

— 環境移行期に着目して —

丹 羽 智 美<sup>1)</sup>

### 問題と目的

青年期になると、児童期までの家庭を中心とした対人関係から、より広域で多様な対人関係を持つようになる。そのような対人関係の持ち方について、Bowlbyの愛着理論の中でも青年期において最も中心的な役割を占める内的作業モデルの概念によって理解されるようになってきている。

内的作業モデルとは自己と他者の有効性に関する内的表象である。つまり、乳幼児期からの愛着対象との相互作用によって作られた、自分自身が愛着対象にどのように受容されているかについての自己に対する主観的な確信と、その愛着対象からどのような応答を期待できるかについての他者に対する主観的な確信のことである。Bowlby (1973) は前者を自己の作業モデル、後者を愛着対象の作業モデルと呼んでいる。

また、愛着対象の作業モデルは愛着対象以外の他者へと般化される (Bowlby, 1973)。愛着対象について肯定的な作業モデルを形成した子どもは、両親以外の他者にも受容される価値のある存在であると確信し、いかなる時も自分を助けてくれる人物の存在を確信している。また、愛着対象について拒否的な作業モデルを形成した子どもは、両親だけでなく、他の誰にも望まれない存在であると確信するようになる。これらの確信が、親以外の他者に対する対人行動にも影響を与える。このように、内的作業モデルに基づいて対人的出来事を知覚し、解釈し、未来を予測し、自らの行動プランを立てるのである。そのため、親への愛着による内的作業モデルによって、他の対人関係が規定されるといわれている。

では、親への愛着によって青年期における対人関係はどのように異なるのだろうか。恋愛関係に関しては一貫して親への愛着の影響が見られている。Hazan & Shaver (1987) は、Ainsworth, Blehar, Waters &

Wall (1978) による乳幼児の3つの愛着スタイルである、安定 (secure) 型、アンビバレント (ambivalent) 型、回避 (avoidant) 型に対応するように恋愛関係のタイプを記述している。それらの恋愛関係と幼少期の親子関係の回想について検討を行った結果、暖かい親子関係をもっていると想起した人は、親密な恋愛関係を築くことができる安定型に多いことが示された。また、母親が冷たく拒否的であると想起した人は親密な関係を回避する回避型に多く、父親が不公平であると想起した人は、私が望むように、相手が親密性を望まないかもしれないという不安に悩むアンビバレント型に多いことが示された。

友人関係に関しては恋愛関係とは違い、愛着の影響に差異がみられる。Fischer, Munsch & Greene (1996) は親への愛着が友人関係に影響することを指摘している。Bartholomew & Horowitz (1991) は、面接によってBartholomew (1990) の愛着スタイルによる友人関係の内容を検討した結果、各愛着スタイルによって、友人への自己開示、親密性、関係への統制感に差異が見られた。しかし、Bartholomew (1990) の愛着スタイルは愛着対象を特定していないため、親への愛着が友人関係に影響を与えているとはいえない。そこで、安定-不安定の1次元でとらえた親への愛着と友人関係の質を検討したKerns & Stevens (1996) は、両者は関係がないことを示している。

Kerns & Stevens (1996) において、親への愛着による友人関係の差異が見られなかった理由は3つあると思われる。1つは友人関係形成期間が同一でないことである。遠矢 (1996) が、親密な友人関係は適切な状況でふさわしいレベルの自己開示を相互に行いながら時間をかけて築かれたものであると述べているように、最近友人関係を形成した友人と、長い間友人関係にある友人とでは親密度に違いがある可能性がある。その場合、愛着と友人への親密感の関係は見られにくくなると考えられるため、友人関係形成期間を同一にして検討する必要があるだろう。

1) 名古屋大学大学院教育発達科学研究科博士課程 (後期課程)

2つ目に、愛着の機能が表れやすい状況を考慮していないことである。Simpson, Rholes & Nelligan (1992) は、愛着と恋愛関係におけるサポート関係について検討した結果、回避型はストレスの低い状況において、恋人からサポートを求め、恋人にケアを提供するが、ストレスの高い状況になると、恋人からのサポートを求めることも恋人にケアを提供することもしなくなったことを示している。一方、安定型はストレスの高い状況になると恋人からのサポートを求め、恋人にケアを提供するようになったことを示している。つまり、ストレス状況への対処に、各愛着スタイルにおける内的作業モデルの特徴が表れるといえる。また、中村・浦 (2000) は、知り合って間もない初期段階の関係では、ソーシャル・サポートへの満足度が友人との関係性に影響することを示している。つまり、ストレス状況での相互作用によって、その後の関係が左右されるのである。ストレス状況での他者との相互作用には親への愛着による内的作業モデルが影響すると考えられるため、その後の対人関係は親への愛着の影響を受けていると思われる。

3つ目に、親への愛着を安定-不安定の1次元でとらえ、不安定的愛着の質的差異が考慮されていないことである。各愛着スタイルにはその機能の仕方に差異があるため、親への愛着を1次元で検討することは適切に愛着の影響を検討できない可能性がある。

そこで Bartholomew (1990) は、内的作業モデルの概念を用いて愛着スタイルをとらえる方法を提唱している。Bartholomew は愛着対象の作業モデルを他者に般化されたものとして他者モデル (model of others) とし、自己の作業モデルを自己モデル (model of self) とした。各モデルを肯定的か否定的かでとらえ、その組み合わせにより愛着スタイルをとらえた。つまり、自己モデルも他者モデルも肯定的な安定型 (secure)、自己モデルが否定的で他者モデルが肯定的なとらわれ型 (preoccupied)、自己モデルが肯定的で他者モデルが否定的な愛着軽視型 (dismissing)、自己モデルも他者モデルも否定的な拒絶不安型 (fearful) に類型される<sup>2)</sup>。

Bartholomew (1990) の概念は、愛着対象が特定さ

2) Bartholomew (1990) は Hazan & Shaver (1987) の愛着スタイルと、Main, Kaplan & Cassidy (1985) の成人愛着面接による愛着スタイルを検討した結果、成人の回避型には2種類あることを指摘した。そのため、Bartholomew の愛着スタイルは Ainsworth の愛着スタイルに以下のように対応する。安定型が安定型に、アンビバレント型がとらわれ型に、回避型が愛着軽視型と拒絶不安型に対応する。

れていないが、Brennan, Clark & Shaver (1998) によって、愛着対象に関わらず、他者モデルは愛着対象への回避 (avoidant) で、自己モデルは愛着対象への不安 (anxiety) でとらえられることが示された。そこで丹羽 (2002) は、親への愛着を愛着回避と愛着不安でとらえる尺度を作成している。この尺度は、親への愛着を Bartholomew (1990) の愛着スタイルでとらえることができるという点で有益であるといえる。

また、関係形成期間を同一にする、ストレス状況を設定するという点から、高校から大学への学校間移行という環境移行期に焦点をあて、大学で新しくできた友人関係について調査することが適当であると思われる。環境移行期は移行に伴って大きな変化が生じるため、高いストレスを感じやすい。浦 (1992) が、サポートを自分のまわりの他者から受け取ることができると感じている人はそうでない人よりもストレスを低く評価し、そのストレスに対して適切な対処を行うことができると述べているように、移行後の新環境に適応するためには、環境に合った対人ネットワークを再構成する必要がある。その中でも友人は身近なサポート源として重要な役割を果たしていると考えられる。そのため、親への愛着がどのように友人関係に影響するかを検討することは、環境への適応という点からも意味のあることだと思われる。

そこで本研究では、丹羽 (2002) によって作成された親への愛着尺度を用いて、Bartholomew (1990) の愛着スタイルから環境移行期における友人関係について検討することを目的とする。特にストレス状況における相互作用後の、友人関係が安定した時期に、大学でできた最も仲のよい友人との友人関係を検討することによって、親への愛着による友人関係への影響を検討する。また、その性差も検討する。

## 方 法

調査協力者：大学生・短期大学生628名（男性306名：平均年齢18.22/SD.51、女性322名：平均年齢18.08/SD.28）。

調査時期：2001年4月中旬から下旬と6月下旬から7月上旬に行った。以後、前者を第1回調査、後者を第2回調査とする。

調査内容

①親への愛着尺度：丹羽 (2002) によって作成された、愛着不安8項目と愛着回避9項目で構成された尺度 (Appendix)。5段階評定で回答を求めた。第1回調査で行われた。

②友人関係：岡田 (1995) より一部改変して用いた。本研究では大学でできた最も仲のよい友人に対して評定を

求めたため、「みんな」「グループ」という表現を使っている項目は原尺度の表現にあわせて「相手」と置き換えて使用した。特定の友人に対して評定できない項目は排除した。計16項目、4段階評定で回答を求めた。環境移行期における友人関係は、入学後1ヶ月程度で人数、心理的距離が安定することが示されているが、相互作用する期間の長さも考慮に入れて、6、7月の第2回調査で行われた。

## 結果と考察

### 1. 友人関係尺度の因子分析

岡田(1995)より一部改変して用いた友人関係尺度の因子分析を行った。すなわち、全16項目に対し主因子解を行ったところ、固有値は第1固有値から2.88, 1.98, 1.28, 0.90, 0.84...と変動し、明確な3因子性が認められたため、3因子解を採用した。そして当該因子の因子パターンが.35以上の項目を抽出し、再度因子分析(プロマックス回転)を行った結果がTable 1である。第1因子には「相手からどうみられているのか気になる」といった、気遣いに関する4項目がみられた。第2因子には「お互いの領域にふみこまない」といった、ふれあい回避に関する4項目がみられた。第3因子には「本心を打ち明ける」といった、親密性に関する4項目がみられ

た。 $\alpha$ 係数は第1因子が $\alpha = .73$ 、第2因子が $\alpha = .65$ 、第3因子が $\alpha = .47$ であった。第2因子と第3因子の $\alpha$ 係数が低かったが、分析の有用性を考慮してそのまま用いた。

### 2. 親への愛着と友人関係の関係

親への愛着と友人関係との関係をみるために、相関係数を算出した。その結果がTable 2である。愛着不安とは、気遣いとふれあい回避との間に有意な正の相関が( $r = .09, p < .05$ ;  $r = .10, p < .01$ )、親密性の間に有意な負の相関( $r = -.12, p < .01$ )がみられた。愛着回避とは、気遣いと親密性との間に有意な負の相関がみられた( $r = -.14, p < .001$ ;  $r = -.20, p < .001$ )。

Fischer et al. (1996)は、対人関係への志向性には性差があることを述べている。そこで性別に相関係数を算出した。その結果がTable 3とTable 4である。

男性には愛着回避において、気遣いと親密性との間に有意な負の相関がみられた( $r = -.17, p < .01$ ;  $r = -.22, p < .001$ )。一方、女性には愛着不安において、気遣いとふれあい回避との間に有意な正の相関が( $r = .14, p < .05$ ;  $r = .14, p < .05$ )、親密性との間に有意な負の相関( $r = -.18, p < .01$ )がみられた。つまり、友人関係と関係があるのは、男性は愛着回避、女性は愛

Table 1 友人関係因子分析結果(プロマックス回転後)

| 項 目                   | F 1  | F 2  | F 3  |
|-----------------------|------|------|------|
| 気遣い                   |      |      |      |
| 13 相手からどう見られているのか気になる | .77  | -.11 | -.17 |
| 1 相手の考えていることに気を使う     | .60  | .07  | .13  |
| 12 楽しい雰囲気になるよう気を使う    | .58  | -.07 | .04  |
| 4 互いに傷つけないよう気を使う      | .52  | .21  | .12  |
| ふれあい回避                |      |      |      |
| 5 お互いの領域にふみこまない       | .13  | .73  | -.04 |
| 2 お互いのプライバシーには入らない    | .02  | .69  | -.08 |
| 11 相手の言うことに口をはさまない    | .13  | .43  | .14  |
| 8 相手に甘えすぎない           | -.17 | .42  | .11  |
| 親密性                   |      |      |      |
| 16 本心を打ち明ける。          | .05  | -.30 | .50  |
| 10 お互いの約束は決してやぶらない    | -.02 | .16  | .47  |
| 15 相手のためにならないことはしない   | -.07 | .23  | .42  |
| 14 真剣な議論をすることがある      | .14  | -.22 | .35  |
| 寄 与                   | 1.70 | 1.64 | .90  |
| 因子間相関                 |      |      |      |
| F 1                   | 1.00 | .30  | .36  |
| F 2                   | .30  | 1.00 | -.07 |
| F 3                   | .36  | -.07 | 1.00 |

Table 2 親への愛着と友人関係との相関係数

|        | 愛着不安    | 愛着回避     |
|--------|---------|----------|
| 気遣い    | 0.09*   | -0.14*** |
| ふれあい回避 | 0.10**  | 0.05     |
| 親密性    | -0.12** | -0.20    |

\* p<.05 \*\* p<.01 \*\*\* p<.001

Table 3 親への愛着と友人関係の相関係数 (男性)

|        | 愛着不安  | 愛着回避     |
|--------|-------|----------|
| 気遣い    | 0.08  | -0.17**  |
| ふれあい回避 | 0.03  | 0.04     |
| 親密性    | -0.01 | -0.22*** |

\*\* p<.01 \*\*\* p<.001

Table 4 親への愛着と友人関係の相関係数 (女性)

|        | 愛着不安    | 愛着回避  |
|--------|---------|-------|
| 気遣い    | 0.14*   | -0.14 |
| ふれあい回避 | 0.14*   | 0.03  |
| 親密性    | -0.18** | -0.05 |

\* p<.05 \*\* p<.01

着不安であるという結果が示された。

男性は他者から分離し、自律的に行動することに価値がおかれ、女性よりも対人関係への志向性が低い傾向にある (Fischer et al., 1996)。そのため、男性は他者に依存せず、自律的な行動が主体となり、女性よりも友人との心理的距離が大きいと思われる。その程度を左右するのが親への愛着回避であると考えられる。つまり、愛着対象の作業モデルは愛着対象以外の他者へと般化されるため (Bowlby, 1973)、親への愛着回避が高いほど、親密な対人関係を回避しようとすると思われる。そのため、友人への親密性を形成しようとせず、友人との関係性を回避するため、気を遣うことが少ないと考えられる。

一方、女性は対人関係への志向性が高く (Fischer et al., 1996)、親密な関係を形成、維持しようとする傾向にある。そのため、対人関係に関する不安を感じやすいと考えられる。そして Bowlby (1973) が、愛着対象の作業モデルは愛着対象以外の他者へと般化されると述べたように、親への愛着不安の高い人は、対人関係不安も高いと思われる。だから、友人に嫌われないように気を遣い、嫌われるのが恐いため、相手の深いところまで踏み込んでいくことができず、ふれあい回避をしてしまい、友人への親密性が形成されにくいと考えられる。

### 3. 親への愛着の友人関係に及ぼす影響

親への愛着と友人関係には関係があることが示された

ため、分散分析を行った。親への愛着の2側面である愛着不安と愛着回避について、各平均値以上を高群、平均値以下を低群とした。また相関係数の結果より、性別によって親への愛着が友人関係に異なった影響を及ぼすことが考えられるため、愛着不安×愛着回避×性別の3要因分散分析をおこなった (Table 5)。なお、分散分析における男性の各セルの人数は、愛着不安低群・愛着回避低群50名、愛着不安低群・愛着回避高群81名、愛着不安高群・愛着回避低群62名、愛着不安高群・愛着回避高群113名であった。女性の各セルの人数は、愛着不安低群・愛着回避低群132名、愛着不安低群・愛着回避高群48名、愛着不安高群・愛着回避低群76名、愛着不安高群・愛着回避高群66名であった。

その結果、気遣いにおいて愛着不安×愛着回避の1次の交互作用傾向がみられた ( $F(1,620)=3.83, p<.10$ )。

愛着不安の単純主効果を検討した結果、愛着回避高群では愛着不安高群の方が愛着不安低群よりも有意に気遣い得点が高かったが、愛着回避低群では愛着不安高群低群の間に有意差は見られなかった。

愛着回避高群を愛着スタイルでいうと、愛着不安が低く、愛着回避が高い人は愛着軽視型に類型される。愛着不安が高く、愛着回避が高い人は拒絶不安型に類型される。Bartholomew & Horowitz (1991) の愛着スタイルによる対人関係傾向によると、愛着軽視型は他者との親密な関係を回避する傾向があるため、友人と親密な関係をもっていないし、また、もとうとしていないことが考えられる。そのため、友人に対して気遣いをする必要がないのだろう。

また、愛着回避低群を愛着スタイルでいうと、愛着不安が低く、愛着回避が低い人は、安定型に類型される。また、愛着不安が高く、愛着回避が低い人は、とらわれ型に類型される。つまり、他者と親しくなることが比較的簡単にでき、人に受け入れられないことを恐れない安定型と、私は他者と親しくしたいが、相手はそう思っていないのではないかという不安が高いとらわれ型の間に気遣いの差がみられなかった。

安定型ととらわれ型で有意差が見られなかった要因として関係初期であったことが考えられる。中村・浦 (2000) は、知り合って間もない初期段階の関係では、ソーシャル・サポートへの満足度が関係性に影響するが、付き合いの長い関係ではそれはおこらないことを示している。つまり、南・山口 (1991) が示したように、第2回調査の時期は友人の数や親密性が安定している時期だと思われるが、まだお互いについて分からないことも多く、気を遣いあう関係にあるのかもしれない。そのように考えると、関係初期における愛着軽視型の気遣いの低

さは、愛着軽視型の対人関係への志向性の低さが特徴的に表れた結果といえるだろう。

また、気遣いにおいては、愛着回避、愛着不安、性の主効果がみられた ( $F(1,620)=8.19, p<.01, F(1,620)=12.90, p<.001, F(1,620)=4.56, p<.05$ )。愛着回避低群の方が愛着回避高群よりも有意に気遣い得点が高かった。また、愛着不安高群の方が愛着不安低群よりも有意に気遣い得点が高かった。そして、女性の方が男性よりも有意に気遣い得点が高かった。女性の方が対人関係への志向性が高い (Fischer et al., 1996) ため、友人を気遣うのだと考えられる。

ふれあい回避については愛着不安の主効果がみられ ( $F(1,620)=6.37, p<.05$ )、愛着不安高群の方が愛着不安低群よりも有意にふれあい回避得点が高かった。愛着スタイルでいうと、愛着不安の高い人は、とらわれ型か拒絶不安型に類型される。とらわれ型は他者と親しくしたいが、相手はそうに思っていないのではないかと不安になる傾向があり、拒絶不安型は他者と親しくして、傷つけられるのが怖くて対人関係を回避する傾向がある (Bartholomew & Horowitz, 1991)。つまり、愛着不安の高い人は、対人関係不安を高く持っているため、友人に対してふれあいを回避するのだろう。

一方、愛着不安が低い人は、安定型か愛着軽視型に類型される。安定型の方は他者と親しくなることが割と簡単にできる (Bartholomew & Horowitz, 1991) ため、

友人に対してふれあい回避はしないと考えられる。愛着軽視型は、他者と親しくしないほうが気楽である傾向を持っている (Bartholomew & Horowitz, 1991) ため、ふれあい回避が高いことが推測されるが、ふれあい回避が低いという結果がみられた。Simpson et al. (1992) は、回避型はストレスが低減している状況ではサポート要求行動やケア行動をよく表すのだが、ストレス状況では接触を回避する行動を示すことを示唆している。第2回調査時期は環境移行期に伴うストレスが低減している時期であると思われる。そのため、安定型と同様に、愛着軽視型もふれあいを回避しない行動をしている可能性がある。

また、Kobak & Sceery (1988) は、愛着軽視型は社会的コンピテンスが高く不安も低いという自己評価をするが、友人からは敵意が高く、不安も高いという評価をされるという差異がみられることを示している。この結果は、愛着軽視型はネガティブな感情が生起することによって他者に頼らなければならない状況になるのを避けるために、自己評価にバイアスがかかっている可能性を示唆している。つまり、愛着軽視型のふれあい回避に対する評価にバイアスがかかっている可能性が考えられる。

そして、ふれあい回避には性の主効果がみられ ( $F(1,620)=15.48, p<.001$ )、男性の方が女性よりも有意にふれあい回避をしていることが示された。男性の方

Table 5 友人関係に対する愛着回避×愛着不安×性別の3要因分散分析結果

|        |        | 男 性          |              | 女 性          |              |       |                   |       |
|--------|--------|--------------|--------------|--------------|--------------|-------|-------------------|-------|
|        |        | 愛着不安低群       | 愛着不安高群       | 愛着不安低群       | 愛着不安高群       |       |                   |       |
| 気遣い    | 愛着回避低群 | 12.18 (2.30) | 12.32 (1.65) | 12.16 (2.40) | 12.59 (2.03) |       |                   |       |
|        | 愛着回避高群 | 10.93 (2.88) | 11.87 (2.57) | 11.50 (1.75) | 12.65 (1.86) |       |                   |       |
| ふれあい回避 | 愛着回避低群 | 10.67 (2.05) | 10.87 (1.84) | 9.98 (1.99)  | 10.36 (2.01) |       |                   |       |
|        | 愛着回避高群 | 10.74 (2.33) | 11.08 (1.96) | 9.73 (1.98)  | 10.56 (1.88) |       |                   |       |
| 親密性    | 愛着回避低群 | 10.84 (2.16) | 10.85 (1.81) | 11.51 (1.89) | 11.12 (1.76) |       |                   |       |
|        | 愛着回避高群 | 10.34 (2.04) | 10.38 (2.07) | 11.88 (1.85) | 10.74 (1.71) |       |                   |       |
|        |        | 主 効 果        |              |              | 交 互 作 用      |       |                   |       |
|        |        | ①愛着回避        | ②愛着不安        | ③性別          | ①×③          | ②×③   | ①×②               | ①×②×③ |
| 気遣い    |        | 8.19**       | 12.90***     | 4.56*        | n.s.         | n.s.  | 3.83 <sup>+</sup> | n.s.  |
|        |        | 低群>高群        | 高群>低群        | 女性>男性        |              |       |                   |       |
| ふれあい回避 |        | n.s.         | 6.37*        | 15.48***     | n.s.         | n.s.  | n.s.              | n.s.  |
|        |        |              | 高群>低群        | 男性>女性        |              |       |                   |       |
| 親密性    |        | n.s.         | 4.15*        | 17.02***     | n.s.         | 5.83* | n.s.              | n.s.  |
|        |        |              | 低群>高群        | 女性>男性        |              |       |                   |       |

<sup>+</sup> p<.10 \* p<.05 \*\* p<.01 \*\*\* p<.001

が対人関係への志向性が低い (Fischer et al., 1996) ため、親密な関係を持つていないことが考えられる。そのため、男性の方が友人へのふれあい回避が高いのであろう。

親密性においては、愛着不安×性の1次の交互作用がみられた ( $F(1,620)=5.83, p<.05$ )。愛着不安の単純主効果を検討した結果、男性では愛着不安高群低群に有意差はみられなかったが、女性では愛着不安低群の方が愛着不安高群よりも親密性が有意に高かった。愛着スタイルでいうと、愛着不安の高い人は、とらわれ型か拒絶不安型に類型される。とらわれ型は他者と親しくしたいが、相手はそうのように思っていないのではないかと不安になる傾向があり、拒絶不安型は他者と親しくして、傷つけられるのが怖いので対人関係を回避する傾向がある (Bartholomew & Horowitz, 1991)。両者は対人関係不安が高いため、友人に対して親密性が感じられにくいと考えられる。特に女性は対人関係への志向性が高いため、そのような差異がみられたのだろう。

一方愛着不安が低い人は、安定型か愛着軽視型に類型される。安定型は他者と親しくなることが割と簡単にできる傾向がある (Bartholomew & Horowitz, 1991) ため、友人との親密性が高いのだろう。愛着軽視型は、他者と親しくしないほうが気楽である傾向がある (Bartholomew & Horowitz, 1991) ため、友人との親密性は低いと思われるが、親密性が高いという結果が見られた。Kobak & Sceery (1988) により、愛着軽視型は自己評価にバイアスがかかっている可能性が示唆されている。つまり、対人関係への志向性が高い女性にとって、友人との親密性が低いということは自己評価を下げたり、不安を生起させるネガティブな情報であると考えられるため、女性においては親密性の評価にバイアスがかかっている可能性があると考えられる。

また、親密性については、愛着不安と性の主効果がみられた ( $F(1,620)=4.15, p<.05$ ;  $F(1,620)=17.02, p<.001$ )。愛着不安低群の方が愛着不安高群より親密性得点が高く、女性の方が男性よりも親密性得点が高かった。

## 総合的考察

本研究は環境移行期に焦点をあて、親への愛着による友人関係の差異について検討した。対人関係傾向を規定する核となるのは、親への確信や期待をもとに作られた内的作業モデルである。Hazan & Shaver (1987) や Bartholomew & Horowitz (1991) によって愛着スタイルによる対人関係傾向が示されている。それらは特にストレス状況における相互作用の中に表れやすく

(Bowlby, 1973)、それが初期の関係性に影響を与える可能性が示唆されている (中村・浦, 2000)。また、環境移行期において、新しい環境に合った対人ネットワークを再構成することは、ソーシャル・サポートの観点から、新しい環境での生活を適応的に過ごす上で重要であることが指摘されている (南・山口, 1991)。そこで、新環境での友人の数や心理的距離が安定する時期の友人関係に対する親への愛着の影響について検討を行った。

その結果、愛着不安が低く、愛着回避の高い愛着軽視型は、友人に対する気遣いが少なかった。愛着軽視型は親への愛着回避が高いことから、親は必要なときに助けることを拒否するような近づきがない存在であるという親への確信をもっている。そのような親への確信が他者に対しても般化され、他者は助けることを拒否する近づきにくい存在であるという確信をもつ (Bowlby, 1973)。そのため、他者を頼りにせず、自分で対処するという特徴がみられ、対人関係への志向性が低い傾向がある (Bartholomew & Horowitz, 1991)。だから、友人に気を遣うことが少ないのだろう。

また、愛着不安が高い人は、友人に対するふれあい回避が高く、親密性が低いという結果がみられた。愛着不安が高い人は愛着スタイルでいうと、とらわれ型か拒絶不安型に類型される。両者とも、相手と親しくしたいが、親密な関係を相手に求めることは迷惑ではないかという不安が高いことが示されている (Bartholomew & Horowitz, 1991)。そのため、友人に対するふれあい回避が高く、親密性が低いのだろう。

そして、愛着不安の高い人の親密性の低さは特に女性に見られた。女性は男性よりも対人関係への志向性が高い (Fischer et al., 1996) ため、各愛着スタイルによる対人関係志向の差異が対人行動に表れ、親密性に影響を及ぼしたと考えられる。

以上の結果より、親への愛着により友人関係に差異がみられることが明らかにされた。その結果の中で、愛着不安が低く、愛着回避が高い愛着軽視型は、友人への気遣いやふれあい回避が低く、親密性が高いという結果がみられたが、親密な関係を回避する愛着軽視型の対人関係傾向から考えられる結果とは異なる。

環境移行期の対人関係は、ストレス状況における相互作用の影響を受ける (中村・浦, 2000)。つまり、環境移行期に伴って新しい環境に合うように友人を再構成するという過程は、新環境で友人に助けをもらい、また、友人を助けるという相互作用によって、友人となる対象が定まり、友人関係が親密になっていくと考えられる。その相互作用の質は、親への愛着による内的作業モデルに影響される。つまり、親への愛着が環境移行期での相

相互作用に影響を与え、それによって友人関係に差異がみられると考えられる。

しかし、愛着軽視型は友人との相互作用の影響を受けずに、友人関係を評価している可能性がある。つまり、Kobak & Sceery (1988) が述べるように、評価にバイアスがかかっている可能性がある。これを Bowlby (1980) は防衛的情報処理とよんでいる。そのため本研究では、愛着軽視型はその対人関係傾向から考えられる結果と異なった結果がみられたと考えられる。今後は、環境移行期において友人関係が安定するまでに、どのような相互作用が行われ、それが関係が安定した時期の友人関係にどの程度影響を与えているのかについて詳細に検討することが望まれる。

## 引用文献

- Ainsworth, M.D.S., Blehar, M.C., Waters, E. & Wall, S. 1978 Patterns of attachment: A psychological study of the strange situation. Hilldale, NJ.: Erlbaum.
- Bartholomew, K. 1990 Avoidance of Intimacy: An Attachment Perspective. *Journal of Social and Personal Relationships*, 7, 147-178.
- Bartholomew, K. & Horowitz, L.M. 1991 Attachment Style Among Young Adults: A Test of a Four-Category Model. *Journal of Personality and Social Psychology*, 61, 226-244.
- Bowlby, J. 1973 *Attachment and Loss: Vol.2: Separation: Anxiety and Anger*. New York: Basic Books. (黒田実郎ほか訳 1977 母子関係の理論Ⅱ: 分離不安 岩崎学術出版社)
- Bowlby, J. 1980 *Attachment and Loss: Vol.3: Sadness and Depression*. New York: Basic Books. (黒田実郎ほか訳 1981 母子関係の理論Ⅲ: 愛情喪失 岩崎学術出版社)
- Brennan, K.A., Clark, C.L. & Shaver, P.R. 1998 Self-Report Measurement of Adult Attachment: An Integrative Overview. In Simpson, J.A. & Rholes, W.S. *Attachment Theory and Close Relationships* (pp.46-76). New York: Guilford.
- Fischer, J.L., Munsch, J. & Greene, S.M. 1996 Adolescence and Intimacy. In Adams, G.R., Montemayor, R. & Gullotta, T.P.(eds.) *Psychological Development During Adolescence. -Progress in Developmental Contextualism- (An Annual Book Series Vol.8, pp.95-129)*. London New Delhi: Sage Publications.
- Hazan, C. & Shaver, P.R. 1987 Romantic Love Conceptualized as an attachment process. *Journal of Personality and Social Psychology*, 52, 511-524.
- Kerns, K.A. & Stevens, A.C. 1996 Parent-Child Attachment in Late Adolescence: Links to Social Relations and Personality. *Journal of Youth and Adolescence*, 25, 323-342.
- Kobak, R.R. & Sceery, A. 1988 Attachment in Late Adolescence: Working Models, Affect Regulation, and Representations of Self and Others. *Child Development*, 59, 135-146.
- Main, M., Kaplan, N. & Cassidy, J. 1985 Security in Infancy, Childhood and Adulthood: A Move to the Level of Representation. In Bretherton, I. & Waters, E. (eds.) *Growing Points of Attachment Theory and Research*, Monographs of the Society for Research in Child Development, 50, 66-104.
- 南 博文・山口修司 1991 大学生活への移行 山本多喜司・ワップナー, S. (編) 人生移行の発達心理学 (pp.179-204.) 北大路書房
- 中村佳子・浦 光博 2000 ソーシャル・サポートと信頼との相互関連について—対人関係の継続性の視点から 社会心理学研究, 15, 151-163.
- 丹羽智美 2002 青年期における親への愛着と適応過程—環境移行期に着目して— 名古屋大学大学院教育発達科学研究科修士論文 (未公刊)
- 岡田 努 1993 現代青年の友人関係に関する考察 青年心理学研究, 5, 43-55.
- 岡田 努 1995 現代大学生の友人関係と自己像・友人像に関する考察 教育心理学研究, 43, 354-363.
- Simpson, J.A., Rholes, W.S. & Nelligan, J.S. 1992 Support Seeking and Support Giving within Couples in an Anxiety-Provoking Situation: The Role of Attachment Styles. *Journal of Personality and Social Psychology*, 62, 434-446.
- 遠矢幸子 1996 友人関係の特質と展開 大坊郁夫・奥野秀宇(編) 親密な対人関係の科学 (pp.90-116.) 誠信書房
- 浦 光博 1999 支えあう人と人—ソーシャル・サポートの社会心理学 サイエンス社

(2000年9月30日 受稿)

付 記

本稿は名古屋大学大学院教育発達科学研究科に提出した修士論文の一部を加筆，修正したものである。

ABSTRACT

The Effects of Attachment to Parents on Peer-Relationships in Adolescence

Tomomi NIWA

The purpose of the present study was to examine the effects of attachment to parents on peer-relationships across the environmental transition from the point of view of Bartholomew's attachment styles. Especially, the present study was dealt with peer-relationships after interactions across the stress situation. The main results are follows: (1) Avoidance to attachment was negatively correlated with Worrying about hurting friends and Intimate relationships for men, while anxiety to attachment was positively correlated with Worrying about hurting friends and Avoiding a deep relationship with friends, and negatively correlated with Intimate relationships for women. (2) The tendency of peer-relationships was differed among attachment styles. However, results about peer-relationships of dismissing type were different from Bartholomew's concept. These findings were suggested that peer-relationships were biased for dismissing type.

Key words: attachment to parents, attachment styles, peer-relationships, environmental transition



## Appendix

## 愛着不安

- 必要な時に親は私の近くにいてくれないのではないかと不安に思う
- 親は私と一緒にいたくないのではないかと不安になる
- 親に見放されるのではないかと不安になる
- 私が親の近くにいたがる時、親はうっとうしく思っているのではないかと心配になる
- 私が親に頼ることを、親は迷惑に思っているのではないかと心配になる
- 親は本当は私を理解してくれていないのではないかと不安になる
- 親は私にあまり関心がないのではないかと心配になる
- 親は困った時に私を助けてくれるか不安に思う

## 愛着回避

- 困ったことがあっても、親に相談したくない
- 親に助言や助けを求めない
- 親に自分のことを必要以上に話すのを好まない
- 親に助けてもらわず、自力でやることを好む
- 私は親から愛されているという安心感を必要としている\*
- 親がいなくなったときのことを考えると不安になる\*
- 気軽に親に頼ることができる\*
- 親に個人的な感情や考えを打ち明ける\*
- 親と一緒にいると安心する\*

\* は逆転項目